CDI ~ after story ~

霧清 宥擧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C D I \ a f t e r s t o r y

【Nコード】

N 6 1 6 0 Z

【作者名】

覺清 宥擲

【あらすじ】

あの日から数日後、新たな主人公羽馬那碧は親を失い、一人で生計を立て、平凡な高校生活を送っていた。そんな中、ある一通の手紙により運命が変わった。

夢（CDI）の続編です。

一日目（前書き）

夢の続編ですが、夢というタイトルを12月31日にCDIに変更します。初心者で、更新に時間の掛かる者ですが、またよろしくお願ひします。

一日目

「実験もいよいよ大詰めか。」
と男は言った。

男は座ると、書類に目を通し始めた。

男は書類に一通り目を通すと、立って窓の向こうの空を見つめた。

男の名は坪田雅史。彼は町長で、町は国のプロジェクトを行う様々な市町村の一つだ。

国のプロジェクトとは、ある年から顕著になってきた学力低下に歯止めを掛けようと始まったCDI（脳の耐久性調査）の事だ。

CDIとは、脳がどれぐらいまで耐えて処理できるかというのを調べる計画のことだ。

それで調査対象の調査結果を監察者（親が多い）が調査終わり次第まとめ、一度市町村の長のもとに集められて、その後国の機関に送られて機関が総ての調査結果をまとめ、国がその結果から学力向上のための案を作るといふ大規模なプロジェクトだ。

ところで何故、CDIと学力向上が関係があるのか。

単に言えば、学力向上のためには、勉強である。しかし、勉強を只漫然としては知識としてつかない。だからといって、脳を限界を越え、酷使する事をする返って悪化してしまう危険性がある。

なので、脳の処理能力の限界を越えないように、より沢山勉強させ、理解してより知識を増やすにはどうすれば良いか、そのために、この計画が立案され、実行に移されたのだ。勿論、人権を尊重してないと方々から反対されたが、国は強行した。

又、これに関する報道や記事や書き込み、掲示板は全て規制され、後、ネットやテレビ、新聞は検閲を受けている。その為この計画を

知る国民は数少ない。

町長は窓を見つめていると、電話が鳴った。町長は窓を見つめていると、電話が鳴った。受付の磐田杏いわた あんからだ。

「お客様がいらっしやいました。」
と彼女は言った。

町長は通してと言い、受話器を置いた。

暫くして、扉がノックされた。町長は入ってと言うと女の人が入ってきた。町長は座つてと言うと彼女は座った。向かい側に町長が座り、話し始めた。

「すまない。こんなことが起きてしまうとは私も、分からなかった。」

「はい。」

「まさか、対象が監察者と監察者の手伝いをしていたあなたの両親を殺すとは。」

「ええ。」

「誠にすまない。あなたの両親になんと詫びれば良いか。」

「はい。それで苗字はもとに戻してもいいですか。」

「ああ。この実験は終わったから。」

「分かりました。」

「それで、葬儀などはこちらで用意させていただきたいのだが。」

「ありがとうございます。では、私はこれにて失礼します。」

「ああ。では。」

彼女は部屋を後にした。

彼女の名は齋日碧。しかし本名は、羽馬那碧。羽馬那柚井と羽馬那か式司すしの實の娘だ。彼女は壊れた西陽葉瑠によって両親を失った。犯人の西陽葉瑠は精神異常のため、捕まっても刑が軽かった。

しかし、彼女は何故偽名を使ったのか。彼女の両親は選ばれた対象の監察者の手伝いをしていた。その為、彼女は学校で対象を監察するために怪しまれないようするため名を変えて、学校にいたのだ。

彼女は町役場を出るとそのまま家に帰った。

家に帰ったが、両親は死んだので一人ぼっちだった。

だが、彼女は高校生だから様々な選択ができた。養子縁組に入る、中退して社会人になる、一人バイトしながら通うなど。

彼女はバイトしながら通うことを選んだ。両親から料理などを教えてもらったりしたから、又両親の遺産があるから選べたのだ。

が、彼女はあまり遺産は生活費に使いたくないので、生活費は卒業迄はバイトの収入で稼ぐことにしていた。

もう夕方なので、夕食を作って、食べた。両親が殺された後、食べる時寂しくて辛かったが、今では慣れてきた。

そして、勉強等をして就寝した。

一日目（後書き）

これからキャラの紹介を少しずつしていこうと思います。
又ご意見やご感想等よろしくお願いします。

二日目（前書き）

さて、前にも言ったようにキャラ紹介をします。

《羽馬那 碧》（はまな みどり）

彼女は学力低下の時代なのにテストでは全てで満点に近い点数を取っている。運動神経は並。

両親を殺した西陽葉瑠を恨んでいたが、あるきっかけで、恨みの対象が両親になり、西陽を許す事になる。

《西陽 葉瑠》（さいよう はる）

実験のせいでもう一つの人格が生まれ、その人格の時、自分の、羽馬那の両親を惨殺した。彼女はその後捕まりはしたが精神異常の為に刑は軽くなってしまう、出所後は行方知らずに。

二日目

朝になった。

いつものように着替えて、バイトに行った。バイトは休日のみに行っている。今日は休日だ。

バイト先に着くと店長が店を掃除していた。

店長の名は津崎加奈。英語が少々得意で、口煩く一度切れると手に負えない。実際、この店には10人のバイトがいたのだが、彼女の機嫌を損ねて彼女のナイフのような鋭い言葉のマシンガンを喰らって、9人が精神に異常を来たし辞めていった。アルバイトは新しく入った彼女とあともう一人いるのだが、もう一人はギリギリの精神状態で時たま休んでいる。

また彼女は店長だが、この店の経営者でもある。店は雑貨などを売る平凡な店で、週に1〜3人、多いときは10人来るといふ寂れた店でもある。しかし、給料は不景気なのに案外高いから、私はアルバイトをしている。

店長がおはようと言うので、機嫌を損ねないようにおはようと言い、そのまま更衣室に行き、この店の制服に着替えた。

制服は緑を基調としたものだが、胸にはこの店のマークがついているが、色合わせが酷い。

早く着替え、店長の手伝いを始めた。店長が指示したところをきれいにしていた。

掃除が終わり、開店の時間となった。

店は開いたが、やはり客らしき人は通らない。又、もう一人のアルバイト仲間は今日は休みのようだ。客が来ないまま、昼になった。昼食はいつも近くのコンビニに行き、買っている。おにぎり数個と飲み物を買って食べた。

そして、客が来ないまま店仕舞いとなった。店仕舞いの片付けを手伝った後、更衣室で着替え、今日は帰りの途中のスーパーに夕食を調達するため寄った。

スーパーに入ると、もう一人のバイト仲間がいた。

名前は田中康人。たなか やすひと 日系韓国人で、特徴は食べ物で例えるならポツキーのように長く細い体。彼は不景気で仕事が見つからず、この店に辿り着いたらしい。

しかし、店長の言葉のマシンガンを二度喰らって心が折れかけていて、今や店長を見ると隠れかけてしまう。

彼は気づいてこちらを見て、やあといつてレジに向かっていた。彼の買い物かごには、ビールやつまみ、惣菜が入っていたので、ちゃんとしたものを食べているのかと心配してしまった。そして、惣菜や野菜、調味料などを買う物かごに入れていった。会計を済まし、家に帰った。

家に着き、ポストを見た。チラシが沢山入っていたが、その中に茶色い送り主不明の封筒があった。

家に入り、早速封筒を開けた。紙が入っていて、そこには

「イマコソケツキセヨ。クニノアクセイヲミスゴスワケニハイカヌ。クニノアクセイニヨリ、ヒガイヲウケシモノタチヨレワレトトモニクニニサバキノテツツイヨクダソウゾ。ワレワレトケツキスルナラココマデコラレヨ。」と片仮名で書いてあり、下には住所が書い

てあったが、取り敢えず夕食を食べ、早めに寝た。

二日目（後書き）

ご意見やご感想をお願いします。

三日目・前半・(前書き)

《大呂 修治》(おおろ しゅうじ)

39歳で、娘はいたが、実験で死亡。妻はその後病んで死亡。

又彼も精神的にダメージを受け、見た目は50代のような相貌になつてしまった。

今は国更隊のリーダーとして国家と闘う。

《溝野 千崎》(こうの ちざき)

猫背で滑舌が悪いが、書いたことと言っていることが大体分かる。

彼は昔軍医だったらしい。

三日目・前半・

朝になった。

テールには沢山のチラシとあの茶封筒が置かれたままだった。

私は茶封筒に入っていた紙だけ残し、後はまとめて部屋の隅に置いた。

紙にかかれた住所が気になり、鞆に紙だけ折り畳んでいれ、食事を済まし着替えて学校に行った。

学校に着くが、友達はいないから静かに席に座った。いや厳密に言えば友達はいたが、その友達は今もう友達ではなくなった。精神異常を起こし、今は行方知らずだ。

SHRが終わり、授業が始まった。始めは溝野千崎（溝野千崎）の授業だ。

彼女の言葉は発音が殆どおかしく、女子の普通の声がほぼ聞こえておらず、皆苦勞せざるを得なかった。しかし、書かれていることは良く分かるのでまだ良かった。そして、授業終了。

次は、爺ちゃん（瓶太空丹森「かめだくにもり」）の授業だ。相変わらず爺ちゃんなのに年齢を感じさせない、また無駄に熱血の授業が、始まった。

先ずは外だから校庭を8周走り、準備体操をした。今日は100mの練習だ。先生はひたすら皆を走らせ、また走り方を指導していた。授業の度に皆、先生に嫌気がするのだ。走っているとき先生を見ると目が怪しく、爺ちゃんだからなのか、いかにも目の保養かと思っ
てしまうほどだった。

後、指導しているとき、よく先生の後ろに太陽があり、頭が日光を反射するため、太陽の光より眩しく、目が痛くなることが多々あった。

まあ、まだ良かったのがこの学校にはプールがなかったことだ。あ

「だったら、先生の目が更に怪しくなって、確実に嫌悪感を覚えてしまつてただろう。」

そして、昼になり、放課後になった。今日は猫背の溝野に呼び出しを受けていた。

職員室に行くと、溝野は窓の側で背筋を伸ばしていた。先生は気付くと椅子に座った。

「羽馬那。独り暮らしには慣れたか。」

「はい。もう慣れました。」

「何か困ったことがあったら、相談してな。」

「はい。ありがとうございます。」

「用件はこれだけだ。些細なことと呼んで済まないな。」

「いえ。ありがとうございます。」

「じゃあ。」

「はい。失礼します。」職員室を出て帰路に着いた。

帰る途中、紙に書いてあった住所のことを思いだした。その住所は帰路の途中にある。暫く黙考して、行ってみることにした。

紙に書いてあった場所に行くと、こじんまりした小さい物置小屋かと思える平屋があった。ついここのかと思つたが、紙に書いてあった場所はやはりここだ。

平屋に近づき、インターホンを押した。暫くして、一人の男が出てきた。何か用かと聞かれたので、紙の事について尋ねると、紙を見せると言ってきたので鞆から出し見せた。男は確認すると中に入れと言った。いきなりの事に戸惑いながらも入っていった。

入ると中は何もなかった。すると男が部屋の一角にあったレバーを引いた。すると、部屋の真ん中にぽっかりと穴が空いた。男に先に降りろと言われたので穴の壁に掛かっている梯子を降りた。

降りた先の地下室は広々としており、明るかった。男は付いてこいと言つので、男の後ろを歩いていくと、男は部屋の中央に着いた後、待っていると言つと又部屋の一角に行つて、何かをし始めた。男が作業中、地下室を見回した。

地下室は隅にテーブルや椅子がまとめられていて、扉が一つだけあった。

何の扉かと思つていたら、男が戻ってきた。作業が終わつたらしい。少しして、正面の壁が動いた。そして男はそこへ行つたので付いて行つた。

中に入るとデスクや椅子、棚があつて事務所らしかった。明かりを点けると男は椅子に座つてと言つと、一度男は部屋を出て、紅茶を手にし、戻ってきた。紅茶を近くに置いて、電話をし始めた。

電話している間、又見回した。

棚には分厚い資料や本が入っており、机の上には人形（昔見た人形が闘う某アニメのやつに出てくる緑に似ている）しか置いておらず、人形が何故置いてあるか分からなかった。

暫くして、男は電話をし終えた。男は少し待つていると言つと向かい側に座つた。長い沈黙が続き、そして扉が開いた。

三日月・前半・（後書き）

ご意見やご感想をよろしくお願いします。

三日月・後編・(前書き)

遅くなつてすみません。

扉が開き、現れたのは：なぜか大呂修治先生だった。

しかも何故か肘を曲げて扉につけ、手を頭の上に翳し、もう一つの手を腰に当て、扉につけた方側の足に片足を曲げ交差し、扉に寄りかかるように立っていて寒気のする格好だった。

先生は男に何かを確認し始めた。

少し経って確認は終わったようで、男は部屋を出て、先生は椅子に腰掛け、引き出しを開け始めた。何か探しているようだった。

数秒後、机に探してたものを置き、話し始めた。

「さてと。羽馬那さん。あなたは国が行っている非道な政策を知っていますか。」

「いえ、知りません。」

「ふむ。でもこの政策に直接ではないが、羽馬那家が少し関わっているからな。」

「えっと、どういうことなのですか。」

「何も知らないのか。ではまず羽馬那家がやっていたことについてから話そうかな。」

彼は羽馬那家が被験者の監察者を手伝い実験を進めていたこと、そして彼女に密かに課せられていた役割などを言った。その時、偽名を使用していた理由が漸く分かった。

そして、修治は机にあった資料を見せた。

「これは何ですか。」

「とある情報筋から入手した国の政策に関する文章だ。読んでみてくれ。」

見てみると字が一杯書いてあって読みにくい、グラフやところどころから読み取れるところから推測するにこの書類は何故この政策

をするのか、又実験地域等についてのようだった。

「まあ、その書類から現在学力低迷状態で、それでこの政策をしていると読み取れる。それでこちらの書類は政策内容についてのものだ。」

書類を受け取り読んでみたが、これはやり過ぎではないかと感じてしまうものだった。

読んでいるとあることが浮かんだ、西陽葉瑠の事だ。彼女はこのくだらぬ事でおかしくなってしまった。

またこの政策は監察者を手伝う人（補助人とも）には、補助金を与えているらしい。

金目当てか分からないが、補助人となつて実験を進めていた両親に対する怒りが沸々と沸いてきた。何故かその傍らで、西陽に対する負の気持ち半分消えていた。

それと金を与えられるのは補助人だけではなくその被験者が居る都道府県や市町村、地区にも少しながら配られるらしい。

町長の顔が浮かんだ。金のために実験を進めさせているのかと疑問が浮かんだ。

「君も憤りを感じているのか。我々も憤りを感じている。だから、国と戦おうとしようとしているのだ。」

それを言った後、彼は人形を目の前に置いた。

「これは、私の娘のものだ。」

驚愕の事に口が閉じれなかった。

もしかして娘さんは…と思ったとき、

「私は大きな咎を背負って生きている。そしてその咎を背負わせたのは国だ。」

そう言うとき彼は私を見つめ直した。

「政策の内容には書かれていないが、私の調べでは、対象となった者たちは皆幼児だった。また国は実験を拒む親は連行して、催眠術をかけて実験終了迄、傀儡同然に補助人と実験をするのだ。」

怒濤の様に言ったその言葉を聞いたとき、彼はもしかして…と思っ

た。すると、

「私は娘を守れなかった。私は娘を死に追いやってしまった。だから、国に引導を渡さなければならぬ。そして、この計画に賛同するのは、国に負の気持ちを持つ者たちだけだ。実際に、羽馬那を案内した彼も、公害の被害者で集団訴訟したのに国に見向きもされなかったのだ。」

一通り話した彼の目は国への怒りで満ちていた。

「私が結成した”国更隊”（こっこうたい）には、全国から2000人以上集まっている。そこで君にも入って欲しい。同じく国に恨みのある者通しとして。しかし、今すぐには言わない。明日またここに来るまで考えておいて。早いと思われても我々にも用事はあからぬ。後、学校ではそのことを悟られるようなことはしないように。」

そう言うのと彼は部屋を出た。部屋の中に一人居るのも嫌なので、あの彼に一言言っ、外に出た。

何故か無性に走りたくなったので、家まで走った。

家に帰り、料理をしていたが、頭は今日の事でいっぱいであった。食べ終わった後、風呂に入りベッドに横になっただけだったが、意識は段々薄れ眠った。

しかし、気付いていなかった。平屋から家に帰るとき、後ろに人がいたことを。

三目・後編・(後書き)

ご意見やご感想をよろしくお願いします。

四日目（前書き）

残りのサブキャラの紹介は外伝という形に変えます。

四日目

朝になった。昨日の事をまだ頭は処理しきれず、痛んでいたが、その痛みを堪えながら、支度して、学校に行った。

行く途中、平屋の近くを通ると平屋に”keep out”のテープが引かれていた。何があつたのか分からなかった。考え始めようとしたが、遅刻するわけにもいかず、考えるのを止めて、再び歩き始めた。

学校に着いて、教室に行き、暫くして、SHRが始まった。入ってきたのは大呂修治先生ではなく、別の先生だった。そして、大呂先生は今日は休みということが告げられた。何だろうと思いつつも、授業は始まった。

授業が終わって、用もないから、すぐに帰った。

帰っている途中、何かの気配、いや視線を感じた。勿論、後ろには誰もいないはずと思いつつも振り返った。やはり、一人いなかった。ほっとしたが、その視線は未だあつた。怖くなり、早足で家に帰り始めた。途中にある平屋を早足で歩きながらも、見てみた。

しかし、そこは空き地となつて、いつも売られている土地に立っている看板が立っていた。

驚愕の出来事に立ち止まりそうになつたが、何とか踏ん張り歩いて家が見えた。早く視線から逃れたいと思い、扉まで数メートルになったところで、家に駆け込むように入つていった。

玄関で乱れた呼吸を調べてから、リビングへ進んだ。リビングは出たときと変わらなかつたが、留守電が入っていた。件数は1件で見知らぬ番号だった。取り敢えず再生ボタンを押した。

「ピー。大呂修治だ。アジトがやられた。しかし、誰もいなかったため皆大丈夫だ。そして、羽馬那。気を付けてくれ。どうやら敵はお前を尾行して、アジトの場所を知ったようだ。返事はまたいつか聞く。我々は取り敢えず次の拠点が出来るまで忙しいし、お前に尾行が付いている以上暫くは会えない。だから、次に会うまでに考えをまとめといてくれ。」

と再生されたが、驚きで体が動かない。

今日見たこと感じたことについての疑問や謎が一気に分かってしまった。それに間接的だが、敵（政府やその一味、又彼らに雇われたのを指す）にアジトの場所教えてしまいアジトがやられた事に驚きと自責の念が出た。

しかし、尾行を付けたのは町長なのか、それとも、知事が気になった。

考えに耽っていると電話が鳴った。誰だろうと思ってディスプレイを見たが大呂修治先生の時の番号とは違った番号が映っていた。

取り敢えず受話器を取って耳に当てた。

どちら様でしょうかと聞いたが返事は来ない。

電話を切ろうとしたとき、まるでホラー映画でよく聞く絞り出すような声が聞こえてきた。

「それ以上関わるなあ……」の一言が流れた後、すぐに切れた。

普通なら怯えてしまうが、怖いのは大丈夫な方だったから、ある考えに至った。

これは敵側からの警告と、又これ以上関われば反逆者の一味とし、殺すということ。

暫くして死の恐怖が全身を被って、座り込んでしまった。

何とか逃れようとするが、無理があった。

取り敢えず去るのを待った。そして、去ったと感じて立ち上がって料理を作り食べ、又恐怖に震える前に眠った。

四目（後書き）

ご意見やご感想をよろしくお願いします。

数日後の土曜日

あれから数日経ったある土曜日。

何時もの通りバイトをすることになる筈だったが、今日は休みと電話があつて、久し振りの暇な日となつた。

しかし、学生だからやることは限られていて、後、友達が居ないから更に限られる。又、ゲームはなく、習い事もしていないので、もっと限られる。

限られた中から何をしようかしばらく黙考した。

しかし、やることは買い出し、小まめな掃除、読書、勉強程度。取り敢えず買い出しをして、時間をそこで少し潰そうと考えた。

今日は時間があるので、いつも行っているスーパーより少し遠いところ（家からは、時間がないときは全く行けない距離）にあるが、いつものスーパーより安いショッピングモールに行ってみることにした。

ショッピングモールに着くと、やはり人で賑わっていた。

ショッピングモールの広大な敷地の中には、規模のでかい本館（日用雑貨や食材売り場などが買える）がほぼ真ん中に鎮座しており、子供などが遊ぶ公園が一角にある。そして、沢山のフードコートは別館（他にもアミューズメントなどもある）にあり、ここに来れば大体のものが買える、又そのまま一日を過ごすことができると言われている。それと駅が近くにある為、平日でも、人で賑わっている状態がよくある。

取り敢えず、不足していたものを調達して、他にも必要なものも調

達した。やはり、沢山買ったが、安かったので、大きな出費とならなかった。

少し重たい荷物を持ちながら、モール内を散策していると大呂先生のような人が見えた。近付いて良いものかと思って辺りを確認したが、怪しい人は居らず、視線も無かった。少し考えて、迷っているように歩きながら偶然出会ったような感じで近づくことにした。

近付いて見ると、やはり大呂先生だったが焦らずゆっくり近付いていった。

その頃、当の大呂先生は、あるものを探していた。あるものは一つだけだったが中々見付からなかった。

その一つはここで手に入るのを知っていたが、この本館は広い為にそれを売っている店が分からなかった。（案内板には名だけしか書いていない、又通い慣れていないため）

さ迷うこと数分目的のものがあある店に辿り着いた。

入る前にふと後ろを見ると、こっちに近付いてくる人影があった。

歩いていると、先生が後ろを向いてこちらに目を凝らしている。気付かれたのかなと思いつつも、更に近付いていった。

近付いてくる人影が漸く羽馬那だと分かった。店に入るうかと考えたが彼女が歩み寄ってきているので来てからにしようと思った。

暫くして、店の前で再会した。（会わなかったのは短い期間だったが）

言いたいことはあったが、先生が買い物をしてから、聞こうと提案

したのでその提案に乗ることにし、先生と店に入ってしまった。
その店で、あるものを調達した後、別館に向かいフードコートの特
ーブルの一つに腰掛けた。が、ここでアジトに関する質問をしては
いけないから、言いたいことは限られる。
何を言おうかと悩んでいると先生は静かに心配させて済まないとい
言だけ言った後、送っていくよと言われ、悩んだが外はいつの間
か日が傾いており、もう夜になりかけていたし、車内で質問を聞く
よとも言ったので先生の車に乗った。

質問しようとするも、何か言いづらく車内は暫く沈黙で満たされて
いた。その沈黙に堪えきれなくなって先生が口を開いた。

「えっと、羽馬那。前にも言ったように次のアジトにする物件を探
していたんだ。本当は探しながら、学校には出たかったが、事が急
を要するから仕方なく休んだんだ。まあ、アジトに適した物件が見
つかって、今内部を調べているところだ。」

話されたことにほおと思っていると、

「それで、羽馬那。お前をあまり危険に曝すようなことはしないと
約束する。が、やはり危険は付き物だ。それでも私たちと共に行く
か。」

と言われ、

「はい。」

の一言を返した。

先生は片手で急に紙を出し、渡してきた。

「そこに書いてある日時にその場所で、顔合わせをする。それと、
紙は厳重に管理してくれ。落ちとしたりすると、又前のように襲撃
されることになる。」

最後に言われたことに頭が痛くなる。

その後車内で少し雑談して、家の前に着いた。別れを告げ、家に入った。そして、顔合わせに期待で胸を膨らませながら、寝る仕度をして寝た。

数日後の土曜日（後書き）

ご意見やご感想をよろしくお願いします。

追伸

CDIが200アクセス突破しました。ここまで行くとは思いませんでした。

読んでくださった方々、読んでいる方々などに感謝です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6160z/>

CDI ~after story~

2012年1月13日01時47分発行